

# 〈機能としての語り手〉から「傷ついた語り手」へ —縁意識の世界観を通して—

広島大学大学院・院生 雷 民激

キーワード：語り手、慢性痛、縁意識

## 1. 問題の所在

語り手の問題は、文学研究と文学教育にとって重要な問題であると従来から認識されてきた。最近では、住田 (2021) が、小学校教育における語り手の問題をも可視化しようとする動きがあった。しかし、丹藤 (2018) は、「語り手とは、実体的作者とは異なる、テキスト内で物語をすすめていく仮の主体である。語り手はテキスト外に実体的に存在するのではなく、あくまで機能であり虚構化されたもの (p. 23)」であり、「語り手は全てを語り尽くすことはできない。(中略)何かを語ることによって別の何かを語らないことであり、あるいは語ることによって別の何かを語ってしまうこともある (p. 24)」と述べ、語り手の概念を安易に文学教育に援用することについて警鐘を鳴らしている。語り手を文学教育にどのように導入するかは改めて考え直さなければならない。

では、語り手の問題は文学研究ではどのように問い直されようとしているだろうか。この試みを継続して行っている田中実<sup>1</sup>は、語り手自身の語りに虚偽があること、言い換えると、文学作品を語る語り手—田中で言う〈生身の語り手〉は、語っている作品そのものではないとする。したがって、語り手の虚偽性を克服するため、田中他 (2018) は「〈語り〉自体を相対化する〈語り〉、二重の〈語り〉なくしてはありえません。作品の生身で登場する「物語」の書き手、すなわち、生身の〈語り手〉の〈語り〉の虚偽性の克服には〈語り手を超えるもの〉＝〈機能としての語り手〉＝関係概念の〈作者〉が必要です」 (p. 74) と述べている。田中は、文学作品の語り手自身が語る行為に注目し、読みの主体である読者が、客体の作品の中に潜む〈語り—語られ〉を超える語り手を通して、〈機能としての語り手〉と同化する読みを求めるのである。

田中実 (2009) によれば「近代小説」それ自体が認識の〈向こう〉、言語の境界領域を〈超越〉した了解不能の《他者》との対峙を必須のものとして要求している (p. 66)」とし、田中論では、了解不能の《他者》を読

むため、田中の読みでは、語り手が語る物語に加えて、「語り手の自己表出」を読むことが必要であると述べている。一方、「語り手の自己表出」をどのように発動するかについて、田中 (2008) では「小説というジャンルは物語と詩から成り、〈語り手の自己表出〉に詩が込められています。つまり、物語という素材は詩という〈語り手の自己表出〉とともにあるのです。わたくしが近代小説の図式を「物語＋語り手の自己表出」としてきたのは、「読むこと」が「還元不可能な複数性」のアナーキーな行為であり、そこから〈本文〉と〈原文〉との二重性によって起こる現象としているからです。」 (p. 13) と述べている。

このように、田中実の論では、「語り手の自己表出」を読むことで、「了解不能の《他者》」と出会い、「自己倒壊」という変容が起きるという考えがあった。田中論では、従来の主客二元論の世界観認識を超え、意識の闇を認識できるようなもう一つの世界観認識があるということである。これが、田中が提示する第三項世界観認識である。田中実<sup>2</sup>はバルトのテキスト論に基づいて、近代小説の「物語＋語ることの虚偽」と言う地平を提示した。こうした地平は、〈語り手を超えるもの〉＝〈機能としての語り手〉の位相に拓かれ、了解不能の《他者》をめぐる問題が問われていることである。生身の語り手が物語りを語るのではなくて、生身の語り手を語る〈機能としての語り手〉がいるのである。

このような田中実の論を国語科教育に導入した教材分析や授業実践が行われてきた。最近の授業実践例としては、「おにたのぼうし」を教材とした山中 (2016)、「故郷」を教材とした望月 (2018)、「鏡」を教材とした村高 (2019)、岡田 (2020) などである。しかしながら、このような導入の試みは課題が多くあることが指摘されている。

まず、田中論の中で提示された〈機能としての語り手〉のあり方に対する概念が曖昧であるという点である。難波 (2015) は、「近代小説」＝物語＋〈語り手〉の自己表出という図式はとてもシンプルです。では、「羅生門」における〈語り手〉とは何？「語り手」とは異なる

る？なぜ違う？その〈語り手〉はどんな自己表出をしているの？それはどこからわかるの？そんな疑問が次々起こります」（p. 62）と指摘している。

また、難波（2016）は、田中論を導入した実践が、「往々して、教師主導の、言い換えれば、教師の語りによって造られた授業になっている」（p. 20）と述べるのに加え、渡辺（2018）が「国語科教育研究者・実践者による理論の援用の段階で、作品論として「第三項」理論を、教材論・実践論における読みの理論として捉え直すという作業が不十分であることが、諸問題の原因であると考えている。」（p. 20）と述べている現状が指摘できる。

以上見てきたように、語り手の概念を国語科文学教育に援用するためには、田中実の論に拠るか拠らないかは別として、文学教育の読みの問題として捉え直す必要があると筆者は考える。語り手はなぜ物語を語りたいのか、語り手が語ることやその語りを聞くことが学習者にとってどのような意味があるのか、こういった問題を、文学教育における根本的な課題として考えなければならない。しかし、これらに触れた先行研究は管見では見当たらない。

本稿は、この問題を考えるための手がかりとして、慢性痛を抱える患者の世界観に注目する。また、慢性痛を抱える患者の身体と精神状態に応用し、「縁」というものの存在を説明する。これらの考察を通して、今まで注目されていなかった語り手の精神状態に注目できると考える。つまり、文学作品の語り手を「慢性痛を抱える患者」として見立てるのである。このことによって、語り手がなぜ語るのか、なぜ語りが作られてきたのかということを考えることができ、また、その語りや語りを聞くことの国語教育としての意義を考えることにつながるのである。さらに、慢性痛の患者である「語り手」が自分自身を一つの物語として語り始める時、自己主体意識が身体と精神の縁に存在するという点から、田中論の〈機能としての語り手〉につながっていくことを示す。

そもそも、文学の授業では、文学作品を語っている語り手がアプリオリに存在するため、文学教育において、語り手を意識させる授業や、語り手を越えた〈機能としての語り手〉を意識させる授業に無理があり、どうしても教師主導（教え込み）の授業になりがちであった。本稿では、この課題を、語り手の精神状態を解明することによって乗り越え、また、語り手と学習者とを「縁意識」によってつなぐことで、学習者の変容（田

中論では「自己倒壊」）が明確になり、文学研究と国語科教育の交差研究をより発展させることができると考える。

## 2. 研究の目的と方法

本稿の目的は、①慢性痛人間の精神状態を分析することによって「縁意識」は単なる意識ではなく、実在することを明確に示すこと、②「縁意識」や「慢性痛の痛み」から示唆される「傷ついた語り手」という概念を田中実論である〈機能としての語り手〉概念に接続することを示すこと、の2点である。

そのために次の3点の方法を採用する。

- (1) 「縁意識」はどのように実在するのかを説明する
- (2) 慢性痛の患者を抱える痛みの精神状態を説明する。
- (3) (1)と(2)を元に、「傷ついた語り手」を構造化し、語り手の概念を、文学教育の読みの問題として捉え直す可能性と課題について考察する。

## 3. 「縁意識—慢性痛」の語りへ

### 3.1. 縁意識と慢性痛の患者

雷（2019）は、「縁」というものが人間の意識に同時存在することを説明した。また雷（2020）は、自分自身の瀕死経験を振り返り、「縁意識」の存在を分析した。「縁意識」が生まれる条件について雷（2022）では以下のように説明している。

筆者には、「縁」の意識はどのように形成されているか。筆者は、持病であるパニック障害に遭い、正常の世界に生きる身体は薬に抑圧されている。しかしながら、薬を飲まないと、正常の世界に戻れなくなる。つまり、薬を飲む筆者と薬を飲まない筆者という二つの主体がある。その二つの間に立つ筆者は、いわゆる、縁に立っている。つまり、「縁意識」を持っている「縁人間」は何か（筆者の場合は、薬）によって生きることができる。一方で、その同じ何かに（筆者の場合は、薬）よって抑圧されて生きているのである。筆者自身を持病という側面から見た場合、言語とは異なり、逆に「代表化されている自己」は抑圧されている側なのである。このように考えると、「縁意識」が生まれてくためには、「代表化されている自己」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあるという複雑な条件が必要なのかもしれない。（p. 17）

また、雷（2022）では、『境界の現象学』で提示された〈痛み慢性痛〉と言う考え方を使い、痛みを持つ慢性痛が縁意識を持つ身体にどのように現れたのかについて、以下のように述べている。

つまり、正常の体を持っている人間は自己の身体に目が向いていない。身体に何か痛みが出る時に、体に目を向ける。痛みなしの体は正常の世界、痛みをもつ体は不正常の世界である。したがって、痛みによって、身体と世界の関係が変わっていく。正常の世界から不正常の世界に通り続ける。しかし、急性痛と慢性痛は違う。急性痛は緊急の手当てを行えば、痛みが我々身体を支配できなくなる。しかし、慢性痛に遭ったら、いつか死に至ることを予知し、痛み支配されて永遠に正常の世界に戻れなくなる。

したがって、慢性痛と「縁意識」が関係するのは、慢性痛に遭った人間は正常人間のように正常の世界に生きる同時に、非正常、つまり、痛みの世界に生きているからである。そう言うことで、慢性痛の人間は縁の世界に生きている。（p. 19）

このように慢性痛の人間は「縁」の世界に生きており、そのことを意識化している、すなわち、「縁意識」を持つのである。

慢性痛の患者にとってその傷ついた身体は、生と死の「縁」に生きている。内部から崩された自己の存在一かつて健康の自己一は、通常は常には意識されていない。しかし、痛みを持って、初めて意識されたようになる。ここにおいて、「縁意識」の存在意識が浮上する。慢性痛の患者は薬がないと生きていけない、何かをしないと死んでしまう。何かをしているのではすでに本来の「自己」ではなくなる。しかしながら、慢性痛の患者は何かをしないと生きられない。その何かをして生きてきた「自己」はもう本来の自己ではない。

慢性痛の患者にとっては、身体の痛みを通じて「縁意識」が浮上する。つまり、存在することを意識する。ここで明示したいのは、「縁意識」というのは、そもそも、意識（自己への意識）そのものであるということである。目にもとらえられないが、確実に存在するように感じる。したがって、本稿は、まず、この「縁意識」が認識ではなく、存在であることを明示したい。

ここで、一人の慢性痛患者を事例として、その身体／意識構造を分析する。

慢性痛患者は、この二つの世界を同時に生きている。

慢性痛患者には、（薬で）生きている現実的な自己と（薬無しで）死んでいる「自己」が現れる。慢性痛の患者はこの二つの自己を持っている。また、薬無しで死んでしまう「自己」が抑圧されると同時に、薬で生きている自己をこの「自己」を抑圧している、という二つのリアリティ性を持っている

一方で、慢性痛の患者は、この二つの自己を持っているのと同時に、薬無しで死んでしまう「本来の自己」が抑圧されると同時に、薬で生きている自己（言わば、現実に痛みを持つ身体）が意識的に、身体の中で行われる慢性痛の身体構造を抑圧している。だからこそ薬を飲んでいる身体が相対化されてしまう。

なぜ、薬を飲んでいる身体が対象化されてしまうのか？それは慢性痛の患者にとっては、過去の自己（慢性痛が抱えていない自己）が存在する意識がまだ残っているからである。しかし、痛み、病気によってむりやりに引き出された自己によって、過去の自己（慢性痛が抱えていない自己）が消されてしまう。内部から崩された自己はかつて健康の自己なのだが、常には意識がされていない。しかし、痛みを持って、初めて意識されるようになるのだが、しかしこれは、すでに死んでいる自己なのである

慢性痛の痛みで内部から崩された自己（かつて痛みがない自己）と今痛みを抱えている自己が同時に日常世界に現れる。それだけでなく、抑圧一被抑圧という構造自体が主体自身を抑圧している。つまり、慢性痛の患者は「代表化されている自己」が抑圧する側でありまた抑圧される側でもあるのである。

まとめると、慢性痛の患者は一人としては、（薬で）生きている現実的な自己と（薬無しで）死んでいる自己が現れる。この二つの自己は同じく慢性痛の患者の身である。また、慢性痛患者が慢性痛という痛みを抱える身体を対象化するのは（慢性痛が抱えていない自己）という内部から崩された自己（代表化されない自己）の存在を意識しているからであり、また、今持病を持っている慢性痛の身体（代表化される自己）が抑圧されていることの意識が生まれるからである。

しかしながら、慢性痛の患者が生と死の「縁」に存在するが、永遠に解放されないと考える。なぜかと言うと、慢性痛に遭った人間は正常人間のように正常の世界に生きると同時に、痛みの世界に生きているからである。

このような縁意識の人間が、周りから理解されない状態は普遍的なことである。その結果、「縁意識」の考



えでは、慢性痛を抱える身体は現実の世界に生きると言う現実无力感が強く目に見える世界は逆に生きる世界ではなくなり、縁の世界に閉じ込められてしまう。つまり、自分自身の生に対する生きる価値がないと思考してしまうのである。

しかしながら、実は、ここから開放される術がある。それは、慢性痛の患者である「語り手」が自分自身を一つの物語として語り始める時、自己主体意識が身体と精神の「縁」に存在するのを意識し、そこから解放しようとする時である。このことについて、A. Frank (2002) は「自分自身の生を語ることは、その生に対する責任を引き受けることである。この責任は拡張されていく。物語の中で、語り手は単に自らの声を取り戻すばかりではない。語り手は他の人々からその声を奪い取っている状況についての証人となるのである。」

(p. 5)

と述べている。

慢性痛という痛みを抱える身体を対象化するのには内部から崩された自己（代表化されない自己）は今持病を持っている慢性痛の身体（代表化される自己）が抑圧されているにもかかわらず、このような複数の自己を持つ身体は言語化することで、つまり、自分自身が生きる道を証言するように、生と死の「縁」に存在する身体を言語化しなければならない。すなわち、単なる、「身体一病い」と言う二元世界を意識するだけでなく、慢性的身体からメタレベル的に語ることなのである。

### 3. 2. 慢性痛の患者から「傷ついた語り手」へ

自身もがん経験者であった A. Frank によって、慢性痛の患者が自分について述べた発話を幅広く収集し、それを「回復の物語」、「混沌の物語」、「探究の物語」の3つに類型化している。それぞれの意味について詳しく述べる余裕がないが、そのうち、「探究の物語」は、「苦しみに向って立ち向かうとするものである。それは、病いを受け入れ、病いを利用しようとする。病いは探究へとつながる旅の機会である。」

(p. 163) と述べられている。慢性痛の病いを受け入れることで、自分の身体と相対しながら自己の中の複数の自己と向き合わせられ、二つの主体を同時に生きることを可視化することであり、そのために、語りが必要なのである。このことについて、筆者は次のように考える。

いわゆる普段の現実世界では、一つの自己が一つの

身体に現れる。でも、何かあって、もう一つの自己が出てくる。そこに、自己が何かに抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることを感じたとなると、そこに、言語（語り）が生まれる。その言語（語り）を通じて、抑圧されている自己内自己のことを意識していく。こうして、自己の中の自己の存在を認め、同時に存在していることができるようになるのである。

ここで、筆者の事例を述べる。筆者は、リアルな慢性痛を抱えている。また、パニック障害を抱えている。一方、筆者は日本語と中国語の二言語話者である。筆者の場合も、内部から崩された自己の存在は本来の自己を抑圧している。薬を飲んでいて生きながらえている自己は本来の自己を強く抑圧し、ときにパニックを引き起こし、瀕死状況を幾度も経験した。

しかしながら、言語の環境を変えると、変化が起きる。パニックが発生した瀕死体験は中国語という語圏の下で起きた。パニックが発生した瀕死体験は中国語の思惟主体で行われた。日本語の語圏に入ると、新しい主体、つまり、日本語の思惟主体がしだいに強くなる。その結果、別の言語思惟によって、新しい主体が作られていく。ずっと抑圧されている本来の自己を少しずつ取り戻すことができると同時に、瀕死体験を抑制することもできるようになったのである。

ここで問題にしたいのは、異なる言語を使用することによって、パニックを引き起こす瀕死体験を抑制することができるという点である。

一つの自己は一つの身体に現れる。しかし、何かがあることで、もう一つの自己が出てくる。そこで、自己が何か（例えばもう一つの自己）に抑圧されていることもわからないまま抑圧されていることの（意識）を感じなかったら、「縁」に立つことはできない。ただ、痛みを持っている身体、薬に抑圧されていると感じている一方である。しかしながら、筆者は、異なる言語を使用することによって、パニックを引き起こす瀕死体験を抑制することができた。異なる言語を使用することで、自己が（痛み）何かに抑圧されていることを認識し、感じたとなると、そこに、言語（語り）が生まれたのである。

したがって、慢性痛にかかることを意識するだけでは、精神状態は解放されるわけではなく、「縁」という「意味の場」（注1）に立ち、異なる言語を使用したことによってこそ、瀕死体験を抑制することができる、痛みを抑圧することができるのである。

筆者の考えでは、〈抑圧—抑圧され〉、それ自体も抑

圧しているというのは、自分の精神が「縁」にすることで、自分の身体を語るようになる行為である。すなわち、筆者は中国の母語圏においてはパニック、死への恐怖感しかないにもかかわらず、日本語の思惟主体で、新しい主体が語られていくことで、「(薬で) 生きている現実的な自己と(薬無しで) 死んでいる「自己」という傷ついた身体の瀕死体験を抑圧することもできるようになる。

したがって、「縁」という「意味の場」に立つことで、自分の傷ついた身体を語ることで、自己の中の自己の存在を認め、同時に存在していることができるようになる。すなわち、慢性痛の患者である「語り手」が自分自身を一つの物語として語り始める時、自己主体意識が身体と精神の「縁」に存在し、そこから解放しようとする。ここから考えると、慢性痛の患者である「語り手」が、その経験を語り直すことで、身体を対象化することができ、自分自身を改めて作り直すこともできるようになる。すなわち、慢性病的身体からメタレベル的に語るのである。

自身もがん経験者であった A. Frank (2002) では、「病いの物語は身体によって語られる。その身体が、それ自体において生きている証言である。その証言の力は証人が自らを証言するものとして存在しているという点に求められる」(p. 196) と述べている。

このようにして慢性痛患者は今生きている身体が対象化され、メタ的に自己自身の身体を捉えることができるようになるのである。しかし、そのメタ的に捉えている自己は、痛みを抱えたままの自己である。痛みを引きずりながらメタ的に捉えることは、「縁」に立ちながら、内部と外部を永遠にループする存在となることでもある。

筆者は、中国にいる自分の瀕死体験を抑圧することもできるようになるのは慢性痛の痛みを抱える身体との距離を取りつつ、傷ついた身体をめぐる語りを通して、慢性痛の患者であることの新たな自己のあり方を認識することができ、傷ついた身体を語り直すことの視点ができたのである。言い換えると、慢性痛の患者の精神状態に「自己倒壊」が起こったのである。

#### 4. 「傷ついた語り手」の価値

##### 4.1. <機能としての語り手>から「傷ついた語り手」へ

田中 (2016) は「客体そのものが無いのならば、我々

の捉える客体も無いことになるのですから、客体そのものは了解不能で永遠に捉えられなくとも何らかの意味で存在しています。すなわち、我々の捉えている客体は客体そのものの言わば、〈影〉としてあり、これをあたかも客体そのものかのようにして世界を捉えているのです。」(pp. 33-34) と述べている。

これに関わって、A. Frank (2002) では「身体は沈黙しているわけではない。しかし、その声ははっきりと語られてはいない。身体は言葉を利用するのではなく、それを生み落とすのである。身体が生み落とす言葉の中に、病いの物語が含まれている。その物語を聴き取ることが困難であるのは、物語の中で身体が語っているのを聞かねばならないからである。病いの物語を語る人々は、単にその病気となった身体を記述しているだけではない。人々の身体は、その物語に固有の形と方向を与える。人々は確かに、病いの物語の中で、自らの身体について話している。しかし、物語の中にあってそれ以上に聴き取りがたいのは、その人を作り出している身体そのものである。」(p. 49) と述べている。(傍線筆者)

田中実の観点と A. Frank の観点を関連して見ると痛みを抱える人間から見れば、特に慢性痛の場合は、痛みが永遠に消えないため、永遠に身体に影響を与える。痛みは永遠に存在するが、慢性痛の痛みを抱える人間にとっては、客体としての身体が痛みの〈影〉に影響され続けて、世界観を構築していく。しかし、客体そのものとしての慢性痛の痛みは、言語で捉えられない、意識で捉えられない、もはや、認識の範囲を越えると言える。医学的にも、捉えられるのは身体に反映される数値である。

したがって、病いの物語の中で、病みの身体を聴き取ることができるようにするために、身体を対象化しなければならない。主体が抑圧されていることの存在を認識しなければいけない。このように主体が対象化されてしまうことを田中 (2021) では<機能としての語り手>と呼んだのであった。

「一人称小説の〈語り手〉は基本的にリスナー、〈聞き手〉に向かって語る〈語り手〉であるにもかかわらず、自身がお話の出来事の中の登場人物でもあります。一方でリスナーに語りながら、他方では物語の時空で活動している。現実にはあり得ない架空の存在、これは小説それ自体が虚構だから成立しています。この作品の〈語り手〉の「私」は自身も無意識の闇を抱え、自分の目に見え、耳で聞き取る相手、対象人物である聞

土や楊おばあさんの内面もみえていません。横並びにしか登場することはできません。これに対して、作品全体の言葉を統括しているのがこの〈語り手〉の「私」を「私」と対象化して語る〈機能としての語り手〉です。」

(pp. 82-83) (傍線筆者)

田中論から考えると〈機能としての語り手〉があるためには、〈語り手〉の「私」を対象化して語ることが必要である。つまり、対象化される〈語り手〉が条件である。慢性痛の患者は痛みで一つの身体を対象化して捉える。正常の世界に生きている主体としての身体、身体が捉えた客体の世界という主客相関を対象化してしまふ。なぜ対象化ができるのか、(慢性痛が抱えていない自己)という内部から崩された自己(代表化されない自己)の存在を意識した上で、今持病を持っている慢性痛の身体が抑圧されていることの意識ができた。慢性痛の痛みで内部から崩された自己(かつて痛みがない自己)と今痛みを抱えている自己が同時に日常世界に現れる。このようにして今生きている身体が対象化され、メタ的に自分自身の身体を捉えることができるようになる。

このような世界観の転換について、田中(2021)は次のように述べる。

「人が主体の捉えている客体の対象と関わって生きている限り、その外部である対象そのものに向かうことはできないからです。これと向き合うには、主客相関の枠組みを相対化するレベルのさらにメタレベルに立つことが必要です。そこで我々主体の及ばぬ了解不能の《他者》の領域と向き合うことになります。」(p. 82) (傍線筆者)

本稿では、〈機能としての語り手〉は「傷ついた語り手」のように捉えることができると考える。「傷ついた語り手」は身体を対象化するのではなく、その中に存在する〈抑圧—抑圧され〉という世界観を抑圧しながら、身体的外部に立って、対象化された身体を語ることである。一つの身体の中で〈語り—語られ〉を超えて語るのである。

言い換えると、田中実が提示した世界観の転換は、慢性痛の患者は自分自身の傷ついた身体を一つの物語の語り手として語り始める時から起きる転換なのである。

慢性痛の痛みを抱える慢性痛の語り手にとっては、客体としての身体が痛みの〈影〉に影響され、世界観

を構築していくと同時に、身体をメタ的に捉えられる。今生きている身体が永遠に了解不能な痛みを抑圧されているからこそ、身体がメタ的に捉えられるようになる。

同時に、慢性痛の語り手にとっては、メタレベルに立つことは、単なる、「身体—病い」という二元世界を意識するだけでなく、それは、慢性病的身体からメタレベル的に語ることなのである〈抑圧—抑圧され〉という構造が主体自身を抑圧している。

したがって、慢性痛の語り手の身体を対象化することができ、自分自身を改めて作り直すこともできるようになることで、了解不能な痛みを抑圧されている身体を解放しようとすることで、慢性痛の患者の精神状態に「自己倒壊」が起こったのである。いわば、慢性痛患者にとっての〈自己表出〉と考えるからである。

筆者が考える〈機能としての語り手〉は、慢性痛の語り手のような内部から崩された自己の存在を通して自分自身の身体を対象化している。同時に対象化される身体(精神)を抑圧し、語れるようになる。これらの二つの条件が満たされた語り手は〈機能としての語り手〉として現れるのである。これが本稿でいう「傷ついた語り手」である。

#### 4.2. 「傷ついた語り手」から考える文学教育の可能性に向けて

文学教育において、語り手を意識させる授業や、語り手を超えた〈機能としての語り手〉を意識させるだけでは、語りの向こう側にある想定される「自己」を単一の実体としてとらえるという認識の陥穽に陥ってしまう。しかし、「傷ついた語り手」の世界観からみると、それは一変する。「語り手」を「傷ついた語り手」と措定することで、「傷ついた語り手」が慢性痛を持っているように、文学作品の「語り手」は永遠に解放されることのない慢性痛を持ったものであり、それでもそこから解放されようとして永遠に語り続ける「語り手」の姿が現れるからである。また、その語りを聞き続けることが、読者—学習者の役割となることが明確になるのである。

慢性痛の患者が生と死の「縁」に立つように、痛みを抱え「傷ついた」人間が「縁」に生き、慢性痛の患者が自分の人生に関して語る語りは内面化される複数の自己が含まれており、その意味で、自己から多様な視点が描き出された語りを読むことで、自分の身体と対峙しながら自己の中の複数の自己と向き合わせられるよ



うになる。「おにたの帽子」、「ごんぎつね」、「故郷」、「鏡」、「山月記」といった文学作品（教材）の語り手を「傷ついた語り手」と考えることで、痛みを抱えて生きることを学習者がともに考えていく文学教育としての可能性が示唆されるのである（雷（2021）（2022）参照）。

抑圧されていることによって生き、しかも、抑圧されているそのことも抑圧して生きていきながらそこから解放されるために永遠に語り続ける「傷ついた語り手」の語りに、学習者が耳を傾ける。それは永遠に終わることがない、カウンセリングのようである。ここにおいて、文学の授業は、ナラティブセラピーの場を体験する場へと移る。このようなナラティブセラピーの文学体験において、教師は、ケアする側として、学習者の発達段階、心理、生物的な変化にとって中心的な役割を果たすものと考ええる。

## 5. 研究の成果と課題

本研究では、慢性痛人間の精神状態を分析することを通じて田中論の〈機能としての語り手〉概念を「傷ついた語り手」に接続することを試みた。その結果、これまで、文学研究と国語科教育では十分議論されてこなかった「語り手」の精神状態の解明こそが「語り手の自己表出」を読むことであると明らかにした。また、この議論が田中論を国語科教育や文学研究の読みの理論としての捉え直しに繋がるのだということを明らかにした。「傷ついた語り手」概念を育てることにより、学習者にとって「縁意識」の存在はより切実に訴えかけてくるものとなる。「縁意識」に触れることによって学習者が刺激され、語り手の問題を自分自身の問題として捉えられることと「自己内自己」という複数の自己の存在と向き合うことができるようになる。こうした文学教育への見取りは、文学研究と国語科教育の交差研究のあるべき姿の一つだと考える。

また、精神科学に基づく「傷ついた語り手」の概念はこれからどのような汎用性を持っていくのか、そして国語科教育や文学研究の展開にどのような価値があるのかは、今後の課題としたい。

### 注

(1) 意味の場とは何かについて、ガブリエル（2018）は次のように述べている。

「存在すること＝何らかの意味の場の中に現れること

である」(p. 97)「存在するものは、すべて意味の場に現象します。存在とは、意味の場の性質にほかなりません。つまり、その意味の場に何かが現象していることです。わたしが主張しているのは、存在とは、世界や意味の場のなかにある対象の性質ではなく、むしろ意味の場の性質にほかならないということ、つまり、その意味の場に何かが現象していることにほかならないということです。」(p. 105)

### 引用参考文献

- 河野哲也(2014)『境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ』 筑摩選書
- 岡田眞範（2020）「村上春樹「鏡」の授業の実践報告-『第三項理論がひらく文学研究/文学教育』を参考に-」、『日本文学』(69)、52-62.
- 住田勝(2021)「語り＝物語行為」に着目した文学テキストの教材研究の可能性」、全国大学国語教育学会 2021 年春期大会
- 田中実(2009)「『近代小説』が、始まる—〈知覚の空白〉、〈影と形〉、〈宿命の創造〉—」、『日本文学』(58)、57-68.
- 田中実(2008)「『読みの背理』を解く三つの鍵—テキスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして『語り手の自己表出』—」、『国文学解釈と鑑賞』(73)、6-16.
- 田中実(2016)「現実とは言葉で出来ている II—『夢十夜』「第一夜」の深層批評—」、『都留文科大学研究紀要』(84)、31-56.
- 田中実・須貝千里・難波博孝(2018)『21 世紀に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究/文学教育高等学校』 明治図書
- 田中実(2018)「『近代小説』の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く：鷗外初期三部作を例にして」、『日本文学』(67)、2-17.
- 田中実(2009)「『近代小説』が、始まる—〈知覚の空白〉、〈影と形〉、〈宿命の創造〉—」、『日本文学』(58)、57-68.
- 田中実(2021)「魯迅『故郷』の秘鑰—「鉄の部屋」の鍵は内にあつて扉は外から開く—」、『都留文科大学研究紀要』(93)、67-84.
- 丹藤博文(2018)『ナラティブ・リテラシー読書行為としての語り—』 溪水社
- 難波博孝(2008)『母語教育という思想—国語科解体/再構築に向けて—』 世界思想社
- 難波博孝(2015)「近代（文学）と近代（教育）との相

- 克」、『国語教育思想研究』(10)、61-63.
- 難波博孝(2016)「第三項理論による教育・授業—合言葉はF 続き—」、『日本文学』(65)、15-27.
- 難波博孝(2018)「新しい実在論」と第三項理論(特集 第三項がひらく文学教育: ポスト・ポストモダンの〈世界観認識〉)」、『日本文学』(67)、18-29.
- フランク、アーサー・W. 鈴木智之訳(2002)『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・論理』 ゆみる出版
- マルクス・ガブリエル(2018)『なぜ世界は存在しないのか』 講談社
- 村高聡子(2019)「語り手に着目した学習指導効果—「鏡」(村上春樹)の場合—」、『中等教育研究紀要』(66)、11-20.
- 望月理子(2018)「〈語り手〉を超える読みをめざして—『故郷』の授業実践の考察—」、『全国大学国語教育学会研究発表要旨集』(134)、187-190.
- 山中勇夫「あまんきみこ『おにたのぼうし』の教材価値と授業実践—「断絶」を見据えて—」、『日本文学』(65)、51-63.
- 渡辺皆仁(2018)「第三項理論を運用した国語科文学教育の提案—複数の自己を生きるために—」(広島大学大学院教育研究科修士論文(平成30年)未刊行)
- 雷民激(2019)「縁・意識の世界観—日中の『故郷』の作品観を通して—」、『国語教育思想研究』(19)、19-28.
- 雷民激(2020)「存在論の哲学論と認識論の文学理論から考える文学教育 第三項理論から「縁」世界観へ」、『国語教育思想研究』(20)、65-76.
- 雷民激(2021)「傷ついた語り手」(第141回全国大学国語教育学会世田谷大会自由研究発表(G会場))
- 雷民激(2022)「縁意識の世界観から考える傷ついた語り手—「おにたのぼうし」を通して—」初等カリキュラム学会第6回大会口頭発表
- 雷民激(2022)「縁意識の世界観から考える文学教育—慢性痛を抱えた「傷ついた語り手」を通して—」、『国語教育思想研究』(25)、15-23.